

赤城

・榛名の

縄文絵巻

# 東国千年の都

前橋・高崎の縄文時代

## 前橋・高崎連携文化財展の開催にあたって

群馬県の中央部、赤城山と榛名山に抱かれた前橋・高崎両市は、遥か昔から人々が暮らし続け、個性豊かな文化を育んできた地域です。それを反映して、両市には多くの史跡をはじめ、さまざまな文化財が残されています。

前橋・高崎両市は、互いに豊かな文化資産に恵まれていることの意義を考え、その有効活用を図る試みとして、平成19年度から前橋・高崎連携文化財展を開催してきました。

今年度は、人々がムラをつくって定住を開始した縄文時代を取り上げます。立体的文様をもつ大形の土器や、漆工芸の技術を用いて彩色された土器、土偶や石棒などの呪術具、

遠く新潟や長野からもたらされた翡翠の玉や黒曜石の石器は、縄文人たちの心豊かな生活と文化を物語っています。

この群馬県中央部に花開いた縄文文化を、ご来場の皆様に体感いただくと共に、かけがえのない自然との共生を図り、将来にわたって心豊かな市民生活の実現を目指す前橋・高崎両市が、今後とも手を携えて歩む一助となれば、本事業開催の趣旨にかなうものと思います。

どうぞごゆっくりとご観覧いただきますようお願い申し上げます。

前橋市長 高木政夫  
高崎市長 松浦幸雄



第1部 <sup>もん よう</sup>さまざまな文様とかたち

1. 縄文土器のうつりかわり

縄文時代は定住生活の時代であり、煮炊きの道具として土器を手に入れた。これは、前の旧石器時代にはなかったことである。

さまざまなかたちや文様をもつ縄文土器は、無秩序につくられたのではなく、時代や地域ごとに、一定の約束事があったことがわかっている。全国各地で出土した縄文土器のかたちや文様をしらべることで、共通の特徴をもったグループに分類できるのである。このグループは「型式」という概念でくられ、初めてその土器が見つかった遺跡名などを付し「\*\*式」と表記することになっている。

縄文時代は、文字による記録がなく、時間の流れを示す層もない。それでいて、全国各地にある遺跡どうしの関係がある程度わかっているのは、実は土器のおかげなのである。土器は、どんな遺跡でも出土し、かたちの変化に富んでいる。こうした土器の特徴を比較することで、遺跡の新旧や交流の様子を知ることが出来るのである。

考古学では、土器のかたちや文様の変化をたどる研究が進められている。これは、土器製作者が世代を重ねるにつれ、つくり方は変化していくものの、技術が継承されるので、つくられた土器にどこか共通点が見出される、ということによる。そして、土器型式を新旧の順に並べていくことで、時間の流れを表す「編年表」<sup>へんねんひょう</sup>がつくられている。

編年表は、土器型式の検討から、6時期(草創期・早期・前期・中期・後期・晩期)に区分され、放射性炭素の半減期を利用した理化学的年代測定法により、最も古い縄文土器がつけられたのは1万年以上前と考えられている。

このように、現代に生きる私たちも、縄文人たちが残した土器を通して、人々の活発な交流を知ることができる。縄文土器は、文字のない時代を読み解いていく重要な情報源なのである。

年代区分(1目盛100年)	前橋・高崎の主な縄文土器	前橋・高崎の遺跡
16000年前		
草創期	隆起線文系 前橋・徳丸仲田	小島田八日市遺跡
9000年前		
早期	捺糸文系 前橋・横塚 押型文系 前橋・柳久保 田戸上層式 前橋・柳久保 鶴ヶ島台式 前橋・鶴ヶ島大畑	御殿遺跡 柏木沢・向滝II遺跡 飯土井二本松遺跡 柳久保遺跡 松之沢・大畑A遺跡
6000年前		
前期	関山式 前橋・堀越中道 花積下層式 前橋・高田下大日 有尾式 前橋・室沢長田D 諸磯b式 前橋・愛宕山 十三善提式 前橋・堀越中道	富田下大日塚遺跡 堀越中道遺跡 横沢新屋敷遺跡 室沢長田D遺跡 上大屋・橋越遺跡群 愛宕山遺跡 井天原遺跡 近戸II遺跡 芳賀北曲輪遺跡 広面遺跡 上百駄山遺跡 堀越中道遺跡
5000年前		
中期	五領ヶ台式 高崎・中尾(寺沢II) 阿玉台式 前橋・鼻毛石中山 加曾利E式 高崎・区分儀寺 (石中岡地域) 焼酎類型 前橋・柳久保C 加曾利E式 前橋・生原藤籠寺前	中尾(寺沢II)遺跡 横沢新屋敷遺跡 大和田遺跡 天神風呂遺跡 天神B遺跡 天神E遺跡 見眼遺跡 向吹張遺跡 八幡塚遺跡 中原遺跡 矢田遺跡
4000年前		
後期	称名寺式 高崎・下佐野 堀之内式 高崎・元龜名 堀之内式 高崎・万相寺 加曾利B式 前橋・馬場東次II	馬場東次遺跡 上中居遺跡 元龜名遺跡 横儀遺跡群 馬場東次I II遺跡
3000年前		
晩期	浮線網状文系 高崎・中里見中川 安行3b式 前橋・安通洞 浮線網状文系 高崎・三ノ尾落合	安通・洞遺跡 元総社寺田遺跡I 芳賀北曲輪遺跡群 中里見根岸遺跡

縄文土器編年表

草創期の土器

早期の土器

前期の土器



隆起線文土器  
(徳丸仲田遺跡)



捺糸文系土器  
(松ノ沢・大畑A遺跡)



捺糸文系土器(鶴ヶ島台式土器)  
(柳久保遺跡)



関山式土器  
(横沢新屋敷遺跡)



諸磯c式土器  
(芳賀北曲輪遺跡)

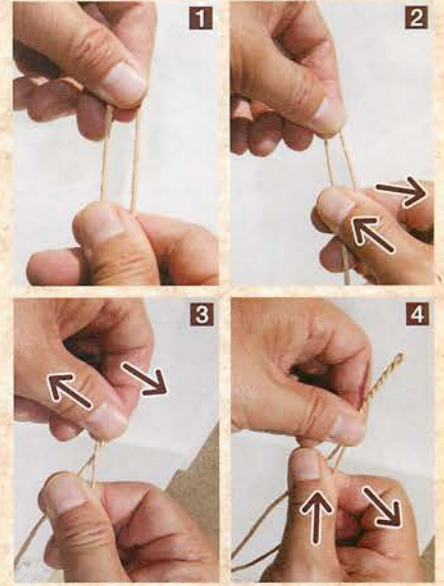


## 2. 文様を付ける

縄文土器には、軽く100種類を超える文様パターンが存在する。縄の撚り方を変えたり、棒に巻きつけたり、結び目をつくったりすることにより多種多様な文様が生まれる。

その他、木の軸に彫刻したものや、シノ竹を使ったり、貝殻を押し当てたりするなど、独創的かつ芸術的な文様も存在する。

さらに、文様の中には、地域や時期などの特徴を表すものが多く、小さな破片だけみても、その時期や文化などの背景を読み取ることができ、「時期判定のものさし」に使われている。



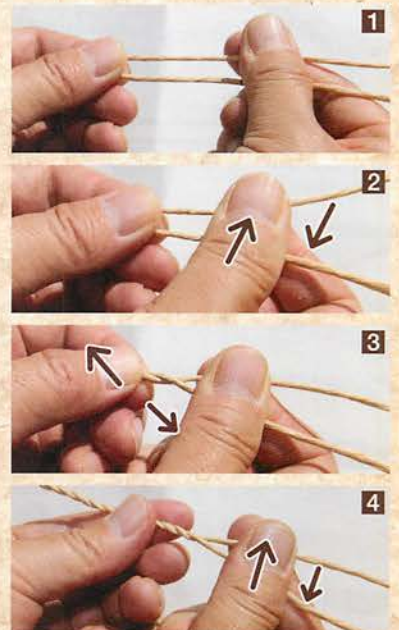
Lの縄をよる(右撚り1段のLを作る)

## 3. かたちと使いみち

縄文土器は、口径と高さの比率やかたちの特徴などから様々な「器種」に分類される。「器種」とは文字通りうつわの種類のことであるが、同時にさまざまな用途に応じたかたちを意味する。

縄文土器における「器種」は、時代を追うにつれ多くなる傾向がある。縄文時代草創期や早期は深鉢など、煮炊きのための道具しかないが、前期から中期にかけて浅鉢などの盛り付け具や、有孔罍付土器、釣手土器などが出現する。後期や晩期になると深鉢以外に注口土器や香炉形土器が一定量占めるようになるほか、壺や蓋など、それまでの時期には見られなかった器種が豊富になる。

このように、時代の変化とともに、新しい器種が生み出されていった。土器のかたちの変化は当時の生活・文化を反映していると考えられ、土器のかたちを知ることが、縄文時代の生活がどのように変わっていったかを知ることもできる。



Rの縄をよる(右撚り1段のRを作る)

中期の土器

後期の土器

晩期の土器



三原田式土器  
(五代伊勢宮IV遺跡)

加曾利E式土器  
(高崎情報団地II遺跡)

称名寺式土器  
(馬場東矢次遺跡)

堀之内式土器  
(万相寺遺跡)

安行3式土器  
(安通・洞遺跡)

浮線網状文系土器  
(三ノ倉落合遺跡)



## 第2部 縄文土器を使った時代

### 1. 縄文の始まるころ

縄文時代に先行する旧石器時代は3万5千年前から始まり、その時代の人びとがつくった石の道具—石器—が各地で発見されている。この石器は、概ね2万年の間、緩やかな新旧の入れ替わりの変遷をしているが、1万8千年前頃を境に大きく変化をみせる。それまで主要な石器であった「ナイフ形石器」がなくなり、石器の両面に精緻な加工を施した「槍先形尖頭器」がつかられる。また、それと前後して、組み合わせ石器として細石器が登場する。また、大型の石槍と局部磨製石斧に代表される長者久保・神子柴石器群が出現する。そして、およそ1万6千年前、日本列島に、土器が現れるのである。

それまで寒冷であった気候はこの頃を境に温暖化に転じる。この気候の変化とともに、人の食物獲得活動の対象であった動植物層が変化する。それに対応して、道具が変化していくのである。

縄文時代草創期は、土器の口縁部に粘土紐を横位に数段貼り付けた文様を持つ隆起線文土器、人の爪を土器の器面に押しつけて施文した爪形文土器、縄の端部などを押しつけて施文した押圧縄文土器、特徴的な縄文を施文した多縄文土器へとという変化が考えられている。隆起線文土器は、前橋市の小島田八日市遺跡で出土している。爪形文土器や押圧縄文土器は、前橋市飯土井中央遺跡や高崎市剣崎長瀬西遺跡で出土している。

縄文時代の最初の土器群は、汎日本的な分布の広がりを見せており、土器の様相も新しい時期の土器群と比べると、土器の大きさ、形、文様の付け方などが非常に画一的で、地域色などを見出すことはできない。



頭無遺跡の細石器群

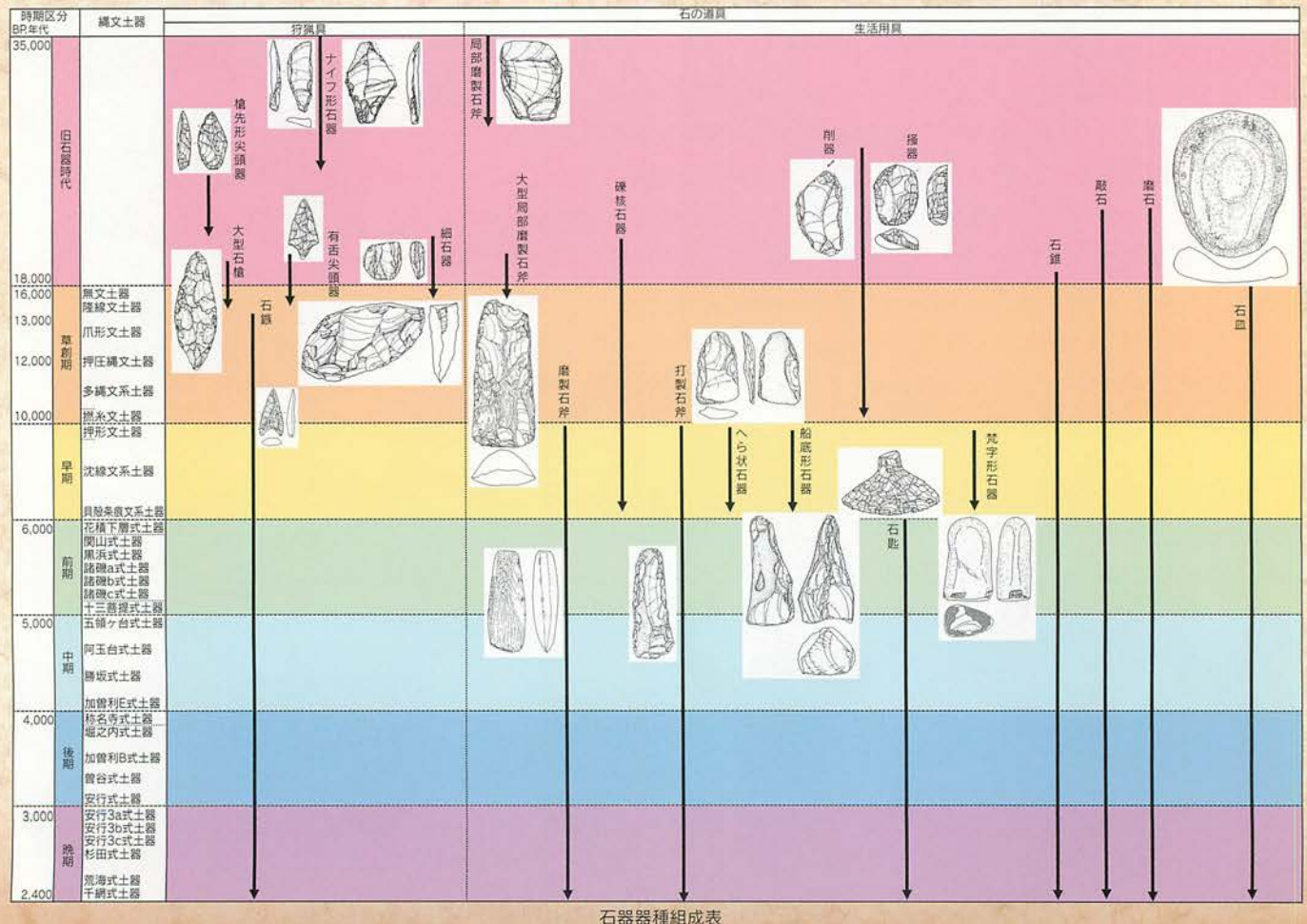


局部磨製石斧



尖頭器

小島田八日市遺跡の石器  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団より提供





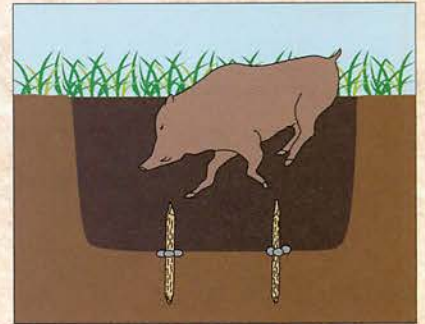
## 2. 縄文のくらし

縄文時代の食生活は、シカ・イノシシなどの陸棲動物を対象とした狩猟や、魚撈、堅果類の採集に支えられていた。

シカやイノシシなどの捕獲には陥穴、ウサギなどにはワナが使用されたと考えられている。陥穴は、地面に大きな穴を掘り、底面に杭などを立てて動物を追い込むためのものであり、赤城・榛名山麓で見ついている。

サケやマスは生まれた川をさかのぼるといふ性質があり、ある時期に一度に大量に獲れることから重要な食糧であったと考えられる。

堅果類は、トチの実やドングリ、クルミ、クリなどが遺跡から見つかり、アク抜きした上で粉末にし、クッキーのようにして食べたと考えられる。縄文人たちは自然の恵みだけに頼ることなく、その自然を積極的に活用して、安定的な食料の入手をおこなっていたのである。



陥穴再現イラスト



陥穴の例(前橋市栗原東遺跡)

## 3. 縄文のころ

縄文時代の出土遺物や遺跡から検出される遺構には、その使用方法や目的が直接わからないものがある。これらは、実用品である「第一の道具」に対し、「第二の道具」とよばれる土偶や石棒はその代表である。

土偶は乳房の表現を持つものが多く、女性を象徴化したものと考えられている。前橋市元総社蒼海遺跡群や高崎市八幡山遺跡からは縄文時代前期の土偶が出土している。土偶は中期以降、盛んにつくられ、前橋・高崎両市でも見つかり、また、高崎市神保植松遺跡では、砂岩製の岩偶が出土している。

石棒は、男性シンボルに似た形をもち、男性を象徴化したものと考えられる。縄文時代前期の発生期のものが、前橋市粕川町室沢長田遺跡や富士見町横室の陣場遺跡から出土している。中期以降石棒は巨大化し、高崎情報団地II遺跡では70kg以上の結晶片岩製の石棒が見つかり、これらは、自然の豊穰や再生への想いを表したものであると考えられている。

こうした遺物のほかに、石を並べてしっかりと石棺をつくった配石墓とよばれるお墓が前橋市横俵遺跡群(大道遺跡)から見つかり、縄文人たちのここに迫る手掛かりとなっている。



元総社蒼海遺跡群土偶出土状況



高崎情報団地II遺跡の石棒



横俵遺跡群(大道遺跡)配石墓



横俵遺跡群(大道遺跡)配石墓近景



## 第3部 前橋・高崎の縄文遺跡

日常の用具であり芸術品ともいえる縄文土器。その器面の装飾が最も雄大に発達するのが縄文時代中期である。ここでは、前橋・高崎両市を代表する縄文時代中期の遺跡を紹介する。前橋市は中期中葉、高崎市は中期後半の遺跡を取り上げ、各遺跡の内容を紹介するとともに、土器の文様に現れた各地域との交流についても触れてみる。

### 前橋の遺跡

#### 1) 旭久保C遺跡

旭久保C遺跡は、前橋市富士見町原之郷に所在する。標高は約150m、旧利根川左岸の台地上、南向きの日当たりの良い場所にある。平成10・11年度に発掘調査がおこなわれ、縄文時代中期を中心とした集落跡が確認された。

出土したさまざまな土器の中で目立つのは「焼町類型」といわれる群馬県と長野県東部を主な分布域とする曲隆線文を駆使した土器である。「焼町類型」以外にも、東関東地方や南関東地方、中部地方、北陸地方など各地域の文様を持つ土器が出土しており、群馬県独自の土器文様と混在している状況が見て取れ、さまざまな地域との交流を基盤として、集落を営んでいたようである。

これらの土器文様は、約4千5百年前、赤城山を目標に利根川や吾妻川などの河川を頼りに峠を越えた縄文人によって伝えられたと考えられる。彼らは、我々が想像するよりもはるかに広範なネットワークでつながっていたのかもしれない。

#### 2) 鼻毛石中山遺跡

鼻毛石中山遺跡は、前橋市鼻毛石町地内にあたり、赤城山南麓を南流する神沢川の右岸の舌状台地上、標高210～230mの南緩斜面にある。

検出された遺構・遺物は、縄文時代早期の陥穴8基、中期中葉の住居跡4軒・土坑118基・炉跡2基・柱穴46本と当該期の縄文土器、後期の土坑1基・集石1基および称名寺式から堀之内式期の縄文土器である。

遺跡の中心となる縄文時代中期は、遺構の検出状況・遺物の散布状態などから、環状集落と想定でき、4号住居跡の南には、土層観察から環状となる盛り土が確認できた。

本遺跡の特徴として、南関東地方に分布の中心を持つ勝坂系（新道式から井戸尻式）の土器と茨城南部・霞ヶ浦周辺に分布の中心を持つ阿玉台系（阿玉台1a～IV式）の土器、東北地方南部に分布の中心を持つ大木系（大木7b式・8a式）土器、さらには、北陸地方の馬高系土器とともに在在系の「新巻類型」に類似する土器が、まとまって出土していることがあげられよう。

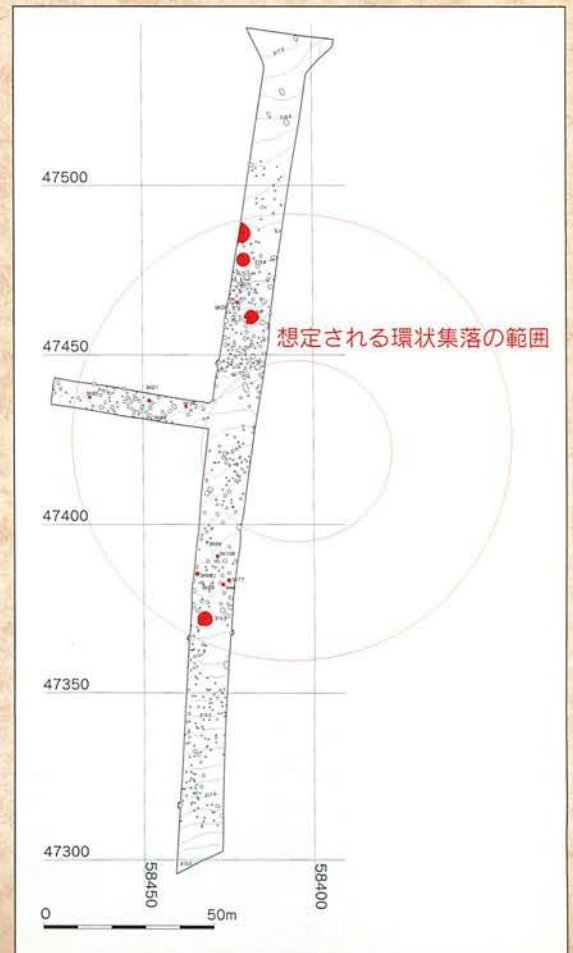
本遺跡は、早期においては狩猟場として縄文人に利用され、中期に入ってはその選地上的利点から集落が営まれたことが想定できる。



旭久保C遺跡遺物出土状態



旭久保C遺跡遺物出土状況



鼻毛石中山遺跡全図



### 3) 五代伊勢宮IV・VI遺跡

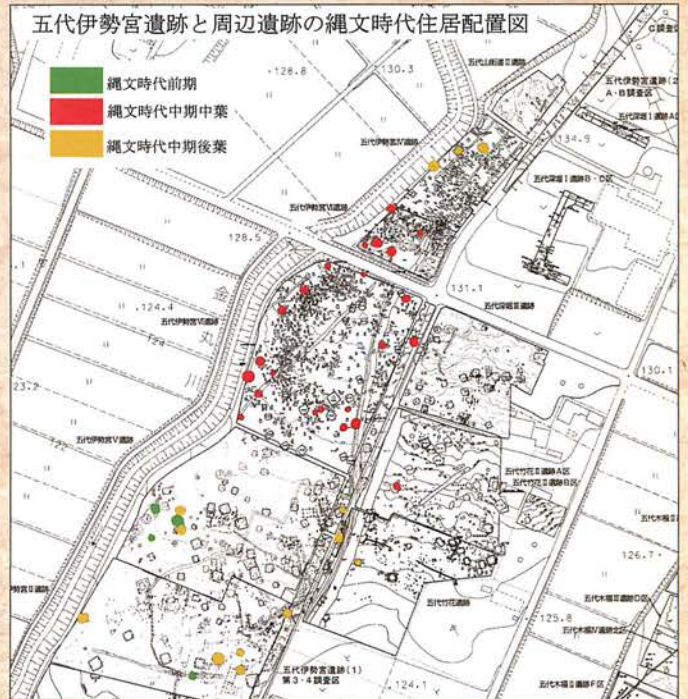
五代伊勢宮IV・VI遺跡は、藤沢川と薬師川に挟まれた舌状台地上、標高115～127mの南緩斜面にある。

五代伊勢宮IV遺跡で検出された遺構・遺物は、中期後葉の住居跡3軒・土坑194基・埋甕3基・集石3基と中期中葉から後葉の縄文土器・石器などである。

一方、隣接する五代伊勢宮VI遺跡で検出された遺構・遺物は、中期中葉の住居跡22軒・土坑753基と当該期の縄文土器・石器などで、検出された住居跡・土坑は、環状を呈する。

本遺跡の特徴として、南関東地方に分布の中心を持つ勝坂系の土器と茨城県南部・霞ヶ浦周辺に分布の中心を持つ阿玉台系の土器、東北地方南部に分布の中心を持つ大木系土器、北陸地方の馬高系土器や在来系の「焼町類型」の土器が、まとまって出土していることがあげられよう。

本遺跡および周辺では、縄文時代前期から中期後葉にかけての長期間にわたって集落が営まれたことが想定できる。

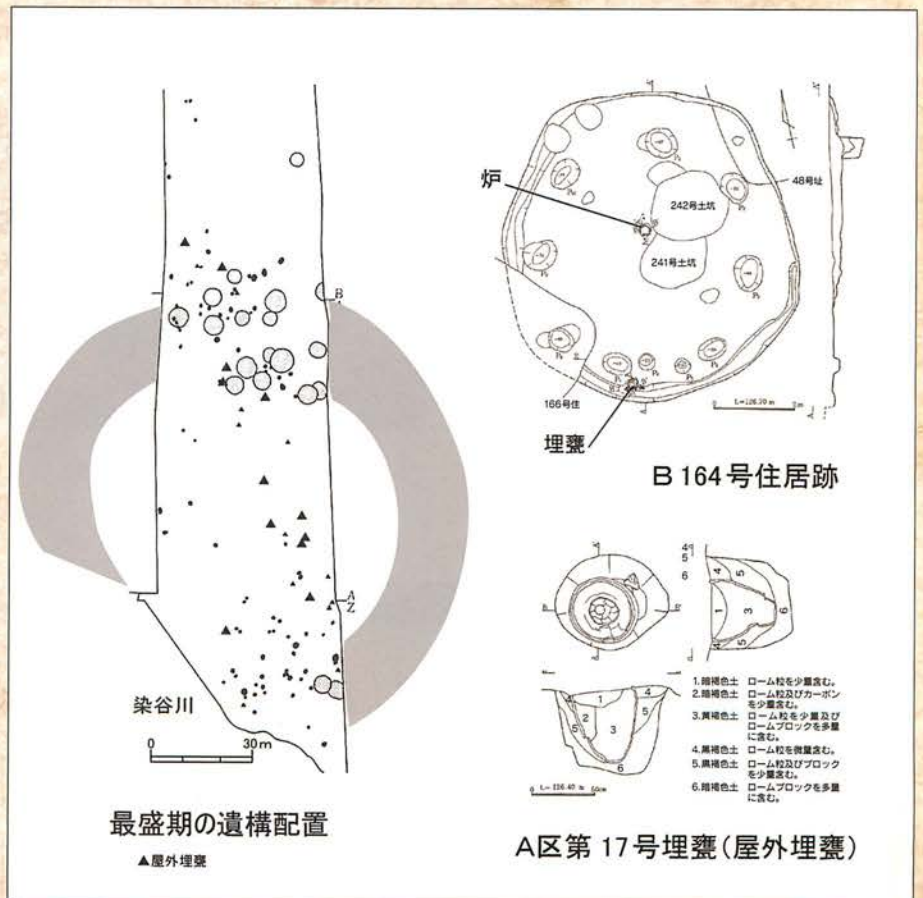


## 高崎の遺跡

### 1) 上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡

上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡は、高崎市東国分町と前橋市の境、染谷川左岸の台地上にある。上野国分寺隣接地で、関越自動車道路の建設に伴い調査された。縄文時代は竪穴住居跡34軒などが発見された。中期後半を主とする集落跡で、出土土器から数世代にわたり営まれたことがわかった。最盛期には、住居配列が環状となるようである。住居に囲まれた場所は、土坑多数や「屋外埋甕」がみられ、食料貯蔵の場所、あるいは墓地が想定される。「埋甕」は同時期の住居出入口部にあり、民俗事例から子宝の恵みを祈るものなどとされる。一方「屋外埋甕」は内部に人骨が存在した例もあり、墓と考えられる。

このほか、出土した石棒や土製耳飾などの特殊品から、各種儀礼の存在がうかがわれ、環状住居配列・墓地の存在などとあわせ、当遺跡が拠点集落であったことを物語る。



【上野国分僧寺・尼寺中間地域】(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 を一部改変



### 2) 白川傘松遺跡

白川傘松遺跡は高崎市箕郷町白川の榛名白川右岸の台地上にある。中心となる中期中葉～後葉は69軒の住居が環状に確認され、未調査部の北側と南側を含めると100軒以上の住居があると推測される。大きく6期に分けられ、1時期あたり3～18軒の集落であるが、各時期はさらに分けられるため、同時代に存在した住居は最大で10軒程度の可能性がある。いずれにしても同じ場所に長期間住居がつくり続けられたという意味で、榛名山南麓で最も拠点になっていた集落の一つであろう。このことは通常の集落からは出土しない翡翠(硬玉)製大珠や土偶、香炉形土器などの出土が裏付けている。

なお、赤城山麓の遺跡ではあまり出土しない、甲信地方の土器の特徴である矢羽根状の文様を施した土器が多いのが特徴で、西からの影響を受けやすい立地を示している。



白川傘松遺跡遠景  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団より提供

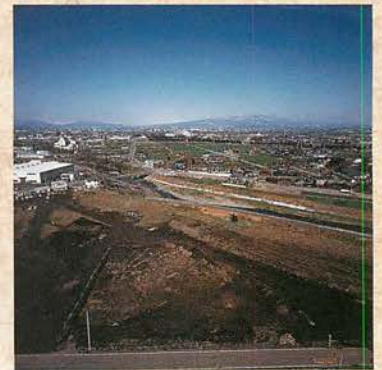


白川傘松遺跡II地区1号住居跡  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団より提供

### 3) 高崎情報団地II遺跡

高崎情報団地II遺跡は、高崎市中大類町地内に所在する。群馬県企業局による情報団地造成二期工事に伴い、平成9年4月より発掘調査が行われ、平成14年3月に報告書が刊行された。縄文時代の遺構として、竪穴住居跡35軒、埋甕、集石土坑、土坑などが見つかっている。また遺物は縄文時代中期後半の加曾利E様式土器や、同時期の石器が多数見つかっている。

特に注目される遺物として、3区土坑群から見つかった彩色ある浅鉢形土器があげられる。この時期の彩色ある土器は、銚子市余山貝塚などで見つかっているが、これほどまとまって見つけた例は極めてまれである。また、新潟県糸魚川周辺から持ち込まれた翡翠製大珠は、群馬県内で出土した中で最も質が良いものの一つである。



高崎情報団地II遺跡から  
赤城山をのぞむ



高崎情報団地II遺跡2区  
竪穴住居(右端に石囲い炉あり)



高崎情報団地II遺跡3区  
彩色ある浅鉢出土状況(3区187号土坑)



彩色ある浅鉢

前橋会場

高崎会場

2010.1.9 [土] → 1.18 [月]  
前橋プラザ元気21 1階 にぎわいホール  
〒371-0023 群馬県前橋市本町2丁目12-1  
午前9時～午後6時(ただし1月9日は午前10時から)

2010.1.30 [土] → 2.8 [月]  
高崎シティギャラリー 2階 第6展示室  
〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1  
午前9時～午後6時